＊＊＊五時間目＊＊＊

そして、翌日の職員室――。

俺はとうとう我慢できず、娘たちへの学生服着用を決定して、マリオンに報告した。

「制服？　ヤヒヤーも好きだねえ～」

「どう考えても、現状の方が目の毒だ……！」

マリオンのからかいに、俺は憮然として答えた。昨日は混乱で、頭が回らなかったが、冷静になれば、当然の配慮だろう。

「それに座学なら許容する言質は体育館で取ったろう？」

「え？」

『『座学ならともかく、激しい運動をさせる以上、体調管理と記録採取はしっかりしておきたい』』

「……ああ、あれか。ちぇ、しくじったなあ」

「ふん。で、社会性を見るためにも、今、当人たちに選定させている」

「へー、まあ、いいわ。事後承諾なのは気に入らないし、あたしのやり方とも違うけど、それがヤヒヤーのやり方なんでしょうから」

「報告が遅れたのは俺が悪かったよ」俺はこの点については素直に謝った。「しかしな……本当に他に人はいないのか？」

俺は気になっていたことを尋ねた。人手が足りない事は前にも聞いている。そのために俺が呼ばれた事もわかっている。だが、三十六人もの面倒を見るのに、俺とマリオンだけではやはり手が足りない気がする。

しかし、マリオンはにべもなく答える。

「人員増強の予定はありません。それが責任者としての決定です」

「……」

「だから、ヤヒヤーには一人何役もこなしてもらうよ」

そう言って、マリオンは本を差し出した。どうやら、資格試験の対策問題集らしい。

「俺もこれで勉強しろと？　この歳で新しい事を覚えろというのは……」

「かのラーズィー（ラーゼス）が医術を志したのは三十路過ぎだったというけど？　あたしの記憶違いかしら？　ヤヒヤー・イブン＝ザカリーヤー？」

「……」

ラテン語呼称《ラーゼス》――アブー＝バクル・ムハンマド・イブン＝ザカリーヤー・

アル＝ラーズィーの名を出されると俺も弱い。俺がイブン＝ザカリーヤーを名乗っている本当の理由は別にある。が、アル＝ラーズィーへの憧れがなかったと言えば、嘘になる。（そりゃ、そうだ。彼こそは中世ペルシャ医学の最高峰。千年前に天然痘と麻疹を明確に区分し、腎潰瘍とマラリアの発症過程を把握し、医療用エタノールの精製を行った傑物。憧れるなと言う方が無理だ。『食事療法で治せるなら、薬物療法を用いるな。単純薬が効くなら、複合薬を用いるな』という説諭と、ヒポクラテス以来の体液病理説を否定した点で、俺はあのイブン＝シーナーよりも上だと思っている）

そして、マリオンはその名を借りたのなら、その名に倣えという。

「今更医師免許は取れとは言わない。とりあえず【保健医】資格を取ってくれればいい。そうすれば、あの娘たちの体調管理を任せられるし、現実的にも【保健医】はヤヒヤーの学力と経験なら、十分狙える範疇よ。博士号なんかよりはずっと実務的だしね」

「待て……【保健医】？」

たしかにその問題集には『保健医試験対策問題集』とあった。しかし、【保健医】とはこれいかに？

「養護教諭と看護師と医師のあいのこみたいな資格よ」

要するに飛天市特有の規制緩和政策の一環らしい。元々、右派経済学者の中には、医師免許などの取得の難しさを、非合理ではないかという声があった。例えば、あのミルトン・フリードマンは『資本主義と自由』の中で、医療行為の免許制度廃止を主張している。旧《荒夏》でも似たような思想潮流はあった。とはいえ、医師免許の完全廃止には、やはり抵抗が根強い。それこそ、フリードマン自身が認めている。

「だから、妥協案が出たの。それが【保健医】制度よ」

医師免許の廃止には反対でも、田舎の町医者へ脳外科手術の資格を与える現行制度には首を傾げる者は多い。これは田舎の町医者を馬鹿にしているのではない。人間の能力には限界があるという意見だ。

つまり、田舎の町医者の患者の九割九分九厘が風邪や軽傷だ。すると、田舎の町医者は風邪や軽傷の治療だけを何年も続ける羽目になる。そんな町医者に「さあ、今日は脳外科手術をやれ！」と言われても困るだろう。

だから、日常的な治療に特化し、それ以外の重病重症患者がいた時には、応急処置の上、専門家に連絡する――そんな職種＝【保健医】の資格を作ってもいいのでは？　どうしても、脳外科手術が必要な時には、素人が行う人工呼吸や心臓マッサージと同じ緊急避難と解釈すべきではないのか？

そして、その【保健医】は医師に比べ覚える事が少ない。つまり、育成が容易い。大量

供給が可能なのだ。そうすれば、風邪や軽傷の診察に何時間も待たされる事もなくなり、同時に重病重症の発見も早くなる。それでも【保健医】が信用できない者は、あえて医師のところへ行けばよい。

「……という理屈で【保健医】制度が生まれたの。実際には、異形使役者の生体調整に一々医師免許を要求していたら、キリがないという事情もあったんだろうけど」

「そうか……そんな由来が……」俺はその【保健医】制度確立の過程に深く頷いていた。

「俺はてっきり『保健室の先生』が、実際には『養護教諭』であるのに『保健医』という資格を持っているのだと、馬鹿な小説家志望が勘違いしたのかと思ったぜ……！」

「……い、嫌ねえ。ソンナコトナイヨー」

マリオンは何故か目線を逸らしながら否定した。

その時、職員室の外から

「入室の許可を求めます」

という若い娘の声がした。

三十六人のうち誰のものか、俺にはわからない。

が、マリオンにはそれがわかったようだ。さっと髪を整え、頬を引き締める。その上で冷たく言い放つ。

「入室の許可を与えます」

――ああ、こいつも母親を……大人をやっているんだな。

俺はその演劇じみた光景に感心せざるを得なかった。

マリオンのこんな姿を見れば、多少の欠点は許容したくもなる。

「失礼します」

と入ってきたのは金髪美貌の娘で、胸元の名札は……巨乳に隠れて見えなかった。

――何が名札で区別しろだ！　役に立たないだろうが！

俺は感心から一転、内心絶叫していた。

だが、金髪美少女が俺の苦悩を知る由もない。彼女は律動的な歩き方で俺とマリオンに近づき、柳の様な腰をかがめて

「御覧下さい」

と紙を差し出した。

その時、幸運にも名札が見えた。Ｍ１１――エムイレブンらしい。

「御覧頂きたいのは、私の乳房ではなく、この紙に印刷してきた資料なのですが？」

「……」

俺は無言でその紙を受け取った。弁解しても泥沼になるだけだろう。少なくとも、隣で

ケラケラ笑っているマリオンはそれを望んでいる。
その紙には女子生徒の制服姿が並んでいた。先程指示した選定作業の結果らしい。そのツーピース型制服の一つに赤字で印がつけられていた。
「このセーラー服に決定したという事だな？」
「はい。【我々】の協議結果です。何か、問題が？」
「いや、特にないが……なるほどツーピースセーラーか……」
「マスターが胸元の露出をお望みならば、この制服に改造を施しますが？」
俺は最後の戯言を無視して答える。
「俺の中でセーラー服と言えば、ワンピースという印象があったのでな。ツーピース型のセーラー服があるなら、こちらの方が機能的だと納得したんだよ」
ここでマリオンが話に入ってきた。さすがは世俗の女子である。
「え？　セーラー服なんて、普通ツーピースじゃないの？」
「いや、呉羽（くれは）はワンピース型のセーラー服だったのでな。いつも着替えが面倒そうだなと思っていたんだ」
「……」
「……」
妙な沈黙が職員室に流れた。
そして、マリオンが何故か突っかかってくる。
「ちょっと待って、クレハ？　それって、日本人だよね？　しかも、セーラー服着ていたって事は女の子だよね？」
「……女子高生だよ。悪いか？」
俺もさすがに失言に気付いた。自然返事がそっけなくなる。
「……ヤヒヤーって、本っ当にいつも女を侍らせているわねー」
「いや、別に侍らせているというわけじゃ……」
「小学生の時、モテモテだったじゃん。あたしがバレンタインデーのチョコあげても『お、ありがとな』で平然と済ますし」
「子供の頃の話だろ？　今さら持ち出す話か？」
大体、中東の小学生が何で日本や欧米の行事を熟知していると思ったんだよ？
「じゃあ聞くけど、ミナ姉（ねえ）とはどんな関係だったの？」
「ミナ姉？　まさか、ソン・ミナの事か？」

「そ、カタール騒乱の時に仲良くやっていたというじゃない？」

ミナ――とは俺の知る限り、韓国系アメリカ人海兵隊員である。カタール騒乱で米軍が介入したため、彼女も中東に派遣され、俺と知り合った。軍人としての能力はほぼ中堅。だが、顔と頭が良くも悪くも子供っぽい女だった。それこそ、俺の前を平然と半裸で動き回る程に。俺を見て、弟を思い出すらしいが……そも、自分が女だとわかっていたのか？とはいえ、明るく朗らかなため、誰からも好かれていた奴でもあった。また

「当時の俺は大学の教職課程、ミナは元々教員志望だ。縁あれば、仲深まりもする。現地住民を懐柔する米軍の方針も考えれば、ミナにとっては俺との関係も任務の一環だったろうしな」

「ふーん」「……」

黒髪の女と金髪の娘が形容しがたい視線を俺に向けてきた。

「だ、大体、何でそこでミナの名前が出てくるんだ？　お前らはミナとどこで知り合ったんだよ？」

「この【娘たち】の初等教育担当だったの」

マリオンは衝撃の発言をした。

「ミナ姉は元米軍海兵隊訓練教官（ドリル・インストラクター）で、正規の民間教職免許持ちよ。この手の計画を進めるなら、咽喉（のど）から手が出る程欲しい人材でしょう？」

「ああ。それはその通りだ。……いや、しかし……」

凄い偶然があったものだ。この業界が狭いとはいえ、あのミナが俺とマリオンの共通の友人だったとは……だが、そうすると……。

「なら、今、そのミナは何をしているんだ？　この小娘どもの相手なら、俺よりはずっと適任だろう？」

「だから、そのミナ姉の助言なのよ。……〝高等教育はヤヒヤーにでも任せなさい〟ってね」

「はぁ？」

「何？　まさか、あたしが幼馴染みってだけでヤヒヤーを呼んだと思っているの？」

「待て。じゃあ、今ミナは？」

「死んだわ。この飛天市が一番荒れていた頃、この娘たちを守るため、一人で戦ってね」

「……」

「勇敢な最期でした」そこでエムイレブンが口を挟んだ。「……それとも、こういう言い回しは生意気でしょうか？」

「……いや……」

どうも今の俺はミナの後任に過ぎないらしい。鈍い俺にもそれ位はわかった。

＊＊＊六時間目＊＊＊

「じゃ、早速制服を造ってもらいましょう」とマリオンは話を切り変えた「エムイレブン、設計図は指定フォルダに格納済みね？」

「はい。問題ありません」

俺はその流れに眉を顰めた。

「待て。造るとはどういう事だ？」

「三次元印刷機で造るに決まっているじゃない？」

マリオンはマリオンできょとんと返す。

俺はようやく齟齬に気付いた。あの娘は『衣料品店を当たってみます』と言っていた。彼女らの容貌は人目を引くから、ネット通販でもするのだろうと思っていた。が、実際はネットでは設計図だけをダウンロードし、現物は三次元印刷機で出力するらしい。

「衣類の三次元印刷も技術的に可能なのは知っていたが……強度や費用の面で不採算だとばかり思っていた」

そもそも俺は古い人間だ。書籍の様なデジタルデータはともかく、衣類の様なアナログデータはやはり手に取って確かめたいと思うのだ。

「勿論、大概は割高よ。でも、ここ飛天市は『籠城戦』も考慮して造られたからね。多少不採算でもその手の設備は整っているの」

そうでなければ、とっと逃げ出している――とマリオンは補足する。

「だが、強度はどうなる？　汎用素材ではどうしても品質が落ちるのではないか？」

「タマゴロモ用の素材を流用すればいいわ。あの強度なら、市販品よりも強靭に仕上がる可能性もあるわ」

なるほど、元々運動着にするわけでもない。ならば、それで十分か？

「ただし、ある程度、『乳袋』ができるのは我慢してね。肌に張り付くタマゴロモ素材を流用するんだから」

「とりわけ、我々は巨乳が多いので。どんな服でも『乳袋』発生の可能性はあります」

「……お前らは何を言っているんだ？」

俺は思わず、二人にツッこんだ。

＊＊＊

そして、マリオンは数分端末を弄った後、
「じゃあ、行きましょう」
と、俺とエムイレブンに呼び掛け、歩き出す。
言われるままにマリオンの後を付いていくと、既に別室で三次元印刷機がガシャガシャ動いていた（どうやら、遠隔操作していたらしい）。
「とりあえず、エムイレブンの体格に合わせて一つ造っているから。試着準備を」
「了解」
マリオンが指示し、エムイレブンが脱衣する。
「は？」
俺はその展開に一瞬ついていけなかった。
エムイレブンが俺の目の前でタマゴロモを脱ぎ出したのだ。男の視線を気にも留めず、齢十六の金髪美少女は肌をさらし始めたのだ。そこには羞恥も躊躇もない。以前にも言及された通り、ノーブラノーパンだったので……、
産毛一つないのでは――と思わせる陶器の様な素肌があらわれる。
「お、おい。まだ出来上がっていないのに……」
勿論、俺が言いたかったのはそういう事ではない。だが、俺の口からはそんな言葉しか出なかったし、マリオンはマリオンで機材を取り出し、平然と答える。
「着替えの前に薄膜型電子生体記録装置を張り付けるの。これも健康管理よ」
代用タマゴロモというわけだ。マリオンはいわゆるデジタルタトゥーをエムイレブンの皮膚にペタペタと貼っている。
……と、俺は何とか理解しようとしているものの、内心はそれどころではない。
エムイレブンは全裸になった。
少女の豊かな胸の膨らみや見事な腰のくびれはタマゴロモ姿で既にわかっていた。が、輝くような肌の皓（しろ）さがここまで眩しいのは、一糸まとわぬゆえだ。
しかもそのエムイレブンは肌を隠すという発想そのものがないらしい。平然たる態度と綺麗な直立不動を崩さず、狼狽する俺にむしろ冷たい一瞥を一瞬向けたぐらいだ。
――ここまでやっていいのか？
俺はそんな思いを抱かずにはいられなかった。
これもマリオンの『教育』の成果だろう。彼女は己の成果を誇るように、少女の美しい裸身に手を這わせ、笑みを浮かべている。エムイレブンに嫌がるそぶりはない。
従順そのもの。有能篤実。……下士官としては理想的だろう。

――だが、人間が人間をこんな風に教育する事が許されるのか？

マリオンは興が乗ってきたらしい。手つきがいかがわしくなる。胸部や臀部にデジタルタトゥーを貼り付ける際、明らかに揉(もま)み解(ほぐ)していた。それでも、エムイレブンはされるがまま、マリオンの思うがまま、うっすらと頬を染めるにとどまっている。

……その律義さが哀れで痛ましい。

眉を顰めている内に、その作業も完了する。

エムイレブンの全身をデジタルタトゥーが覆っていた。全裸である事には変わりないのだが、こうなると不思議といやらしさがない。まるで呪飾と紋様で彩られた古代の巫女のようであり――アッラーよ、お赦し下さい――そこには神威すら、感じられた。

マリオンも同感だったのか、満足げに頷く。

「うんうん。何度見てもギリシャ彫刻みたいに壮麗だわ」

「光栄です」

「言っておくが、ギリシャ彫刻はこんな胸が大きくもなければ、腰が細くもないからな」

「じゃあ、アキバ系のフィギュアみたいに綺麗だわ」

「恐縮です」

「フィギュア？　……お前は何を言っているんだ？」

俺は混乱した。

無学な俺でも、世の中に『フィギュア』スケートという競技があることは知っている。十代の少女を裸同然の恰好で踊らせるという大変いかがわしい代物だ。どういうわけか、観客の大半は女だというし、マリオンがその一人であっても不思議ではない。

しかし、アキバ系――秋葉原と言えば、世界屈指の電気街のはずだ。何故その秋葉原で『フィギュア』の話が出てくるのか？

それに所詮は踊りの一種だろう？　ならば、いかに観客の視線がいかがわしかろうと、選手は肉体を鍛え上げているはずだ。一流の踊り手ならば、自然と全身これ筋肉となる。なのに、このエムイレブンは胸に脂肪が多く、腰や手足の筋肉を抑えている。お世辞にも『フィギュア』に相応しくなど……

「……何か、勘違いしているみたいだけど、まあいいわ」

と、マリオンはいつの間に出来上がっていた制服を印刷機から取り出す。

エムイレブンはその制服を受け取り、裸の上から直接それを着る。

そこで俺はとても重要な手続きが抜けている事に気付いた。

「待て。何故、下着を付けない？」

「ありませんから」

「マリオンのもの……は、使えないな」
「あっさり明言されるのも癪ねー」
「だが、事実だ」
マリオンは胸も小さい。十六で既にEのエムイレブンに比べれば、皆無とすらいえる。白衣の上からでもはっきりわかる。その位小さい。モンゴロイドの中でもマリオンの胸はとりわけ小さい。こいつが半分コーカソイドである事が信じられないくらいだ。だから、下着の流用は困難である。
「……何故かしら、また失礼な想像をされている気がするわ」
「だが、それなら、それこそ、下着を三次元印刷すべきでは？」
「それは私も考えたんだけど、タマゴロモ素材で作ると、結局スポーツブラもどきになりそうなのよ」
巨乳に対しても第二世代タマゴロモはスポーツブラとして云々――とか言っていたな。
「でもそれじゃ、つまらないでしょう？　いい機会だから、補整下着なしの記録を集めておきたいの」そして、マリオンはエムイレブンに問いかける。「どうかしら？　ノーブラノーパンセーラー服の感想は？」
「衣ずれが変な感じです」とエムイレブン。
「そう。あとで報告書をあげなさい」
「いやだから、タマゴロモの上に制服を着させればいいだろう。第一、俺はそのつもりで提案したんだ」
「だから、それじゃ、つまらないと言ったでしょう？」
マリオンは悪戯をするように片目を瞑った。年齢とはかけ離れた、しかし、外見相応の口調だ。なるほど、こいつは生粋の自然哲学者なのかもしれない。
「そもそも、遺伝子操作だけでこんな大きな乳房や細い腰が出来上がると思う？」
「栄養管理に、適度な運動睡眠、適切な生活習慣の成果か？」
だが、それだとここまで不自然なメリハリはつかない気もする。そして、マリオン曰くそこを補うのが、
「それに加えてタマゴロモによる体型矯正よ。コルセットの発展型みたいなものね。女性ホルモンが的確に活性化するような温度管理とかも行っている」
そうやって、このタマゴロモを鋳型に、娘たちの肉体を作り上げたという。あたかも、偶像を造り上げるかの如く。
「小さい頃から、タマゴロモを着させ続け、おかげで今ではツンと上を向いたEカップ。でも、逆に補正下着なしでどうなるかの記録も一応は欲しいのよ」

だから、しばらくはこの恰好で過ごさせるらしい。つまり、

「俺の視覚的、精神的な苦悩は考慮しないと？」

「私は方針を説明しているのであって、方針を相談しているのではありません」

マリオンは邪な顔で明言した。

俺は大仰に溜め息をつく。そして、

「なら、残りの制服作成は俺がやっておく」

「ん？　文脈が繋がっていないよ？」さすがにマリオンは目聡い。「それとも、ヤヒヤー、女子生徒の制服は自分一人で作りたいの？　それが趣味なの？」

「阿呆」俺は毒づいた。偏差値的には二十も上の相手にこんな台詞を吐くとは意外だった。

「俺はこの手の三次元印刷機を扱い慣れていない。この機会に習熟したいんだ」

「慣れていないのなら」と、エムイレブンが口を挟んだ。「尚の事、一人で挑むのは無謀では？」

「だから、試行錯誤の許可は欲しい」

俺は材料を多少は無駄にするであろうことを示唆した。

「どうしても扱えないようなら、連絡もする。だが、それまでは一人でやらせて欲しい。結局こういうのは他人に頼っていてはいつまで経っても使えないままだ」

「そんな事を言っても……」

「いいわ。許可します」

エムイレブンはなお食らい付いたが、マリオンはあっさり許した。

「助かる」

俺は本音でそう言った。

＊＊＊

印刷役を買って出たのにはもう一つ理由がある。

それは俺自身が復習する時間を欲しかった事である。何しろ、教育現場から離れて長いのだ。

三次元印刷には時間がかかる。計三十六人分の制服作成なら尚の事、だから、その間に高等教育の復習も出来る。俺はそう考え、印刷役を買って出たのだ。

その打算は想像以上に正しかった。

印刷室の奥に座って、俺が端末を立ち上げようとすると、物理的な本棚が丁度目の前にあった。そして、そこには教育学の書籍がズラリと並んでいたのだ。

一冊引き抜くと、その本には付箋と手垢がついてみる。付箋の書き込みは日本語だったので、俺には解読不可能だったが、それがマリオンの文字である事は間違いない。

マリオンが必要物資の多くをここで印刷しているという。

つまり、マリオンは俺と同じ事を考えていたらしい。

「……いや、俺がマリオンの二番煎じなのか？」

＊＊＊

おまけに数時間して職員室に戻ると、目を疑う光景に出くわした。

エムイレブンは子猫のように丸まり、マリオンに膝枕されていたのだ。

奇妙な光景だった。

そもそも、マリオンは『東洋系、特に日本人の年齢はわかりにくい』という典型の女だ。

三十過ぎとはいえ、小柄で細身、おまけに室内労働者のため、その肌が日光や風雪で荒れていない。俺に言わせれば、中学生でも十分通用する。

逆にエムイレブンたち第一世代はまだ十六だが、その肉体は既に大人の女のものに近い。

だから、まるで年頃の娘が年下の少女に依存しきっているように見える。

俺がぽかんと口を空けていると、マリオンがこちらに気付いたらしい。

「おかえりなさい。ヤヒヤー」

「あ、ああ。ただいま」

次の瞬間、エムイレブンの頬が赤く染まる。

金髪碧眼セーラー服美少女が、飛び跳ねるように立ち上がり、いつも通り不動の姿勢をとる。

俺はうっかり差別的な発言をしてしまう。

「思ったよりも、人間的なんだな」

「あ、当たり前です。我々は生まれ方がやや他人と異なるだけの、平凡な人間です」

「平凡……ね」

俺は皮肉気に答えてしまった。だが、エムイレブンは真面目さを崩さない。

「実際、今、私は見られたくない姿を見られてしまいました。初対面の頃の緊張感を維持できなかった証です」

「……待て。あれは緊張していたのか？」

「他に何があるというのですか？」

「……マリオン、これは事実なのか？」

尋ねると、マリオンは大きく肩を竦める。

「補足すると、ヤヒヤーのこの娘との付き合いが浅過ぎ、非言語的コミュニケーションを読み取れなかった――という部分もあると思うわ」

「俺の問題だと？」

「正確にはヤヒヤーとこの【娘たち】の問題。結局、これって、異文化交流の一種だもん。一昔前の日本人だって、西欧人に『何を考えているのかわからない』と言われたりしたわ。でもそれは、コミュニケーションの蓄積が不足していただけ。現に慣れてくるに従って、お互いわからなかったところもわかるようになってきたでしょう？」

マリオンに滔々と説かれれば、なるほど、そんな気がしないでもない。

――ならば、俺にもこの娘を理解できる日が来るという事なのか？

＊＊＊七時間目＊＊＊

翌日の教室――。

俺は【娘たち】全員をタマゴロモからセーラー服に着替えさせた。

ちなみに下着はタマゴロモ素材でブラジャーとショーツを与えてある。マリオンもエムイレブンの記録を半日分精査した結果、『あー、これは垂れるわ。ほっとくと垂れるわー。ブラなしは垂れるわー。やっぱりブラって必要なんだね。大きいと垂れるって実話だったんだねー。あたしは不要でよかったわ。この娘たちの設定も最大Ｆカップで正解だったわ。これ以上欲を出してたら、形が崩れていたわー』という結論に達した（というか、普通に考えれば、わかるだろう！）。だから、あっさり下着の許可も下りた。

勿論、俺も学習していたから、着替えの間は教室の外に出ていた。連中は命令を受けた途端、服を脱ぎ出したので、正直危なかった。が、俺の逃げ足の方が一枚上手だった。

時間を見て、教室に戻ると、三十六人全員が制服姿になっていた。

これで少しはまともな学園になる――と、思っていた俺は甘かった。

今度はその美少女達が喧々諤々の議論を始めたのだ。

昨日までの彼女らはタマゴロモ姿なので腰の細さと高さが目立っていた。

今日からの彼女らはセーラー服姿なので、手足が外に出るので肌の皓（しろ）さが目立つ。

そして、そんな金髪碧眼美少女達は**『誰が眼鏡をかけるか？』**で、スカートの下の腿を

剥き出しにして、議論に熱中していた。
俺はまた頭が痛くなりそうだった。
……一応、三十六人の金髪碧眼美少女【娘たち】は愚物ではない。
『初期のデザイナーベビーは常人よりもやや優れた潜在能力（ポテンシャル）を持つだろう。逆に言えば、その程度に止（とど）まる』
……これがジーンリッチを含むデザイナーベビーについての通説である。
俺が見る限り、【娘たち】はこの通説の範囲で、最大の成果を上げていた。繰り返すが、全員を金髪碧眼にして、美少女に育てただけでも凄まじい。そして、昨日、計測した運動能力、学力水準は共に一級といっていい。
具体的に学力を例にすると、同年齢期のマリオンは大きく下回っているが、同年齢期の俺をやや上回っている。言っておくが、俺が馬鹿だったのでない。マリオンの学力水準が高過ぎるのだ。
つまり、彼女たちは愚物ではない……。
……はずが、何故か、彼女たちは延々**『誰が眼鏡をかけるか？』**で言い争っている。
「……どうして、こうなった？」
「マスターの命令ゆえです」
俺の独白めいた嘆きに、エムイレブンが淡々と答える。
「俺は**『そのままだと見分けがつかないから、何か装飾品でもつけろ』**と言っただけだぞ。髪形を変える事も推奨し、不本意ながら、染色も許可したはずだ」
「ならば、皆が眼鏡をかけたがるのは自然でしょう」
「貴様らは視力が悪いのか？」
「我々の視力については昨夜お渡しした資料で確認済みのはずですか？」
「……何故か全員のスリーサイズが**太文字で**書いてあったアレな」
「健康管理、特にタマゴロモ製造に必要なのです」
なるほど、たしかに３ＤＣＧ用データまで付属していた。それでも、あれ程でかでかと書く必要があるとは思えないが……
「で、何故どいつもこいつも伊達眼鏡をかけたがる？」
「淑女の眼鏡は知的でカッコいいのです。ならば、伊達眼鏡だとしても、かけたがるのは無理なからぬ話です」
「……そうか？」
「実際、ドクターはこの世で最も知的でカッコいいではありませんか」
「……」

俺は理解した。

この連中が伊達眼鏡をかけたがるのは、ドクター＝マリオンに憧れての事らしい。世も末だ。

だが、たしかに俺から見ても今のマリオンは知的でカッコいい（何せ、シカゴ大学だ）。年頃の娘たちが熱を上げるのも無理はない。

むしろ、昔のメガネブスの印象を忘れられない俺がおかしいのか？　いや、待て……

「そう言う貴様は何故眼鏡をかけようとしない？」

「不遜に思えるのです」エムイレブンは断言する。「それに、私はドクターの装飾をまねるよりも、ドクターの内面をまねようと思うのです」

「内面……ね」

俺の言葉は皮肉交じりになってしまった。

勿論、エムイレブンのような若者の志は応援したい。が、ドクター＝マリオンの内面はまねようとしてもまねられるものではない。そんな風にも思える。

ふと窓の外に目をやると、空が青々としていた。

「なあ、エムイレブン、空は何故青い？」

「……レイリー散乱でしょう。空気の構成分子はとても小さいですから」

「それを数学的に証明できるか？」

「それは……」エムイレブンは言葉に詰まった。

「つまり、散乱係数が波長の４乗に反比例するからだが……そんな顔をするな。悪かった。貴様の歳で事前準備無しなら、それが普通だよ」

「マスターも……ですか？」

「ああ、大学の教養課程で習うまでは、今の貴様と似たようなものだったさ。一応は俺の専攻分野だったにもかかわらずな」

「しかし、ドクターなら……」

「今の貴様よりも四つ若くても楽々こなす。それこそ、貴様がまねようとしている『ドクター＝マリオン』の内面――その知性の一端だよ」

「……」

「わかっているだろう。あいつは貴様と同じ十六の時、既に超一流大学の博士号を取り、莫大な金が動く《プラン》の長を任せられ、人類史に名を残す偉業を成し遂げたんだ」

――貴様の様な美少女ですら、その『成果物』の一つに過ぎない。

それをまねようなどとは傲慢が過ぎる。外見のまねに一喜一憂している他の連中の方が、身の程をわきまえている。

思い返せば、マリオンは【娘たち】の健康管理に細心の注意を払い、同時に容姿を褒め称え、重んじていた。

そして、容姿の美しさには健康な肉体と強い相関がある。実際、『健康美』『肉体美』という言葉もある。それどころか、健康な肉体こそ、美しさの起源かもしれない。現に一流スポーツ選手がファッションモデルを兼業している事例は多い。元を辿れば、古代オリンピックも鍛え上げられた健康な肉体の美しさを競う場であった。

人間の能力を外面的性質と内面的性質に無理矢理二分するなら、美しい容姿、高い運動能力、健康な肉体などはすべて外面的性質に類せられる。逆にマリオンの最大の武器たる知性だけが内面的性質に類せられる。

そして、そのマリオン自身はある種の天才（生命工学のような才覚よりも努力がモノを言う分野でも、マリオン級となれば、やはり天才！）でありながら、娘達にはその知性を引き継がせようとはしていない。

――それは不可能と判断したんだろうな。客観的、現実的に。

前述したように、身体能力の強化と知的能力の強化を比較した時、後者の方が圧倒的に困難である。だが、それだけではない。

マリオンの知性がそれだけ突出しているのだ。マリオンは雲の上の住人なのだ。平凡な『俺たち』や、たかが遺伝子を操作されただけの【娘たち】とは、おそらく見ている景色そのものが違う。

――マリオンが、俺や【娘たち】の前で、性的な冗談を繰り返すのは、その程度の話題でもなければ、認識を共有できないと諦めているからか？

実際、マリオンが専門的な最先端生命工学を真剣に話したとしたら、俺も【娘たち】もついていけないだろう。

――あるいは【娘たち】が劣等感に悩まされぬよう、【娘たち】がマリオンを上回っている性的魅力を強調しているのか？

繰り返すが、【娘たち】の知性は同時期の俺よりは上だ。

が、所詮はその程度だ。それで身を立てられる保証はない。

だから、マリオンは自分の娘たちの将来設計として、確実に卓越している美貌をこそ、基盤すべきと考えているのかもしれない。

しかし、エムイレブンはきっぱりと言う。

「それでも、妹に範を示すのが姉の努めです」

俺は「そうか……」と苦笑し、そして、顔を引き締め、告げる。

「ではまず歩き方を改めろ。それも抜本的にだ」

「歩き方を？　それも抜本的に？」エムイレブンは不服を隠さなかった。「お言葉ですが、我々も基本教練は徹底して繰り返しています。当然、歩き方もその中に含まれています。たしかに、基本教練も組織によって微妙に異なります。ですから、マスターのやり方に合わせ、細部修正は必要でしょう。とはいえ、根本は同じはずです。それが基本教練というものです。なのに、抜本的に改めるというのは、あまりに不合理なのでは？」

「だが、スカートを穿いた時の動きが出来ていない」

「は……？」

「大股で歩きたいなら、アバーヤを着るなり、ズボンを穿くなりしろ」

エムイレブンはきょとんとした。

この金髪美少女はキビキビ大股で歩く。だから、スカートの下がチラチラ見える。

それが俺の目に毒だ――という事がさっぱりわからないらしい。

＊＊＊七．五時間目（実質番外編。頁制限に引っ掛かれば、排除？）＊＊＊

「あー、スカートってそういうの不便よねえ」

マリオンはケラケラ笑った。

「和室に上がる時も、スカートだと、腰を降ろしてから靴を脱がないといけないし。何だかんだで面倒臭いし」

「……お前はそういうの気にしていたのか？」

「それが礼儀でしょ」

俺はマリオンの常識的な発言に驚いた。

「お前、意外と淑女だったんだな……」

「当然」

「では、何故、あの【娘たち】にそれを教えてやらんのだ？」

マリオンは大袈裟にため息をつく。

「ヤヒヤー、人は平等ではないの」

「人権は平等であるべきだがな」

「だとしても、十代の金髪碧眼美少女と三十路女は同じではない。少なくとも両者のパンチラの価値には大きな隔たりがあるわ」

「どちらも等しく無礼に思えるが……？」

「いいえ、違うわ。金髪碧眼美少女のパンチラは見て嬉しい。三十路女のパンチラは見て醜い」

俺は考え込んだ。たしかに金髪碧眼美少女……つまり、あの【娘たち】のパンチラは……まあ、快活な印象を与えない事もない。

それに対し、三十路女……つまり、マリオンのパンチラは……。

俺の心臓がトクンと高鳴った。

――ふぇぇっ？

だが、マリオンがそれに気づく事もなく、熱弁を振るう。

「だからね。あの【娘たち】には是非パンチラを振りまいてもらって、皆に笑顔を与える存在になって欲しいの。それでなくても、短いスカートなんて、若い時にしか穿けないんだから。今の内に穿いておいて、後の思い出とするべきなのよ……って、ヤヒヤー聞いているの？」

「んっ？　ああ、まあ、そうだな……」

「……本当に聞いていた？」マリオンは怪訝な顔をしたが、すぐに思い直したらしい。

「あ！　ヤヒヤーってば、金髪碧眼美少女のパンチラを思い出していたのね！　そっかー、それは仕方ないわねー。あのお尻は素敵だもんねえー」

そして、マリオンはまるで女衒（ぜげん）のように、金髪碧眼美少女の魅力について語り出した。

――……。

すると、職員室の外から

「あの……ドクター……」

と例によって、若い娘の声がした。

あの【娘たち】の声である事は間違いない。が……どこかおかしかった。

具体的にどこがおかしいのか、俺にはわからない。

しかし、もう一方のマリオンは察したらしい。

「ヤヒヤー、給湯室に隠れていて」

「は？」

「声音に元気がない。多分、何か悩んでいるんだと思う」

――その悩みは俺には聞かれたくない事かもしれない。だから、職員室の隣の給湯室に隠れていて欲しい。そんなところか……。

俺は納得した。すぐに気配を消して、給湯室に身を隠す。

そして、マリオンは少し声を穏やかにして告げる。

「Ｍ３４、入室の許可を与えます」

「あ、ありがとうございます。ドクター」

そうして、職員室の扉が開けられた。俺は驚き、また寂しくもなった。

まず、Ｍ３４と呼ばれた少女の声には親愛の情があった。俺に呼びかける時には考えられない。

しかも、入って来た美少女の姿を覗き見ても、俺には三十六人の誰かはわからなかった。

――マリオンは声で個体識別をやってのけたのに。

おまけにその感情も判断した。俺には到底無理な芸当だ。

そして、これらを統合して――

『相手の顔も覚えない奴に親愛など抱けるはずもない』

と非難されている気になった。それも何故かあのエムイレブンの顔が脳裏に浮かぶ。

――そもそも俺にはあの娘がＭ３４と確信できないな……。職業柄、他人の顔の記憶や判別には自信があったんだが……。

マリオンは【娘たち】と生まれた時からの付き合いだ。俺とは積み重ねた時間が違う。それは仕方がない。

以前、マリオンに顔の区別がつかないことを相談しても、「まあ、見慣れない異人種が皆同じ顔に見えるのは仕方がないわ。見慣れれば嫌でも見分けられるから、気にしないで」と慰められた。なるほど、日本人には俺のようなアラブ人が全員似た顔に見えるという。その上、ペルシャ系に属するクルド人とも区別がつかないらしい。それと同じ理屈だろう。

――しかし、こうもあっさり個体識別をやられると、装飾や髪形を変えさせる努力が、卑しい小細工に思えてしまうな。

実際、マリオンにはあの三十六人の人間関係も頭に入っているらしく、

「第三世代の皆は今、基本教練でしょう？　皆、体育館に集合済みよ。Ｍ３１は相変わらずだけど、Ｍ３３は苛々しているしょうし、Ｍ３５はさみしがっているはずよ」

と、すらすらと語りやがった。

勿論、マリオンのこの言葉が正しい保証はない。親だからといって、子のすべてを把握するのは不可能だ。だが、マリオンがあの三十六人を大雑把には把握している事は間違いない。そして、俺は大雑把にすら把握できていない。

そして、俺が把握できていないＭ３４が口を開く。

「あの……豆乳の経口摂取量を増やして欲しいのです」

意味がわからなかった。たしかに俺も昨日から【娘たち】と食事を共にしている。その中で、物足りないなと思いもした。しかし、所詮は女子供の食事だし、第一何故豆乳限定

なのだ？　たしかに食事では牛乳代わりに豆乳が出されていたが……。

マリオンが尋ねる。

「理由は？」

「第三世代でＢカップなのは私だけだからです」

俺は返答の突拍子のなさに唖然とした。しかし、マリオンは予測済みだったらしい。

「知っているわ。それが何か？」

「同世代は皆既にＣを突破しています。Ｍ３１に至ってはＤの時もあるのですよ」

「だから？」

「豆乳で蛋白質と女性ホルモンを補いたいのです。そうすれば、私もＣへ成長できるはずです」

「……」

最後の沈黙は、俺のものだ。何というか、これはまた……とりあえず、マリオンは俺に隠れるよう指示して正解だった。このやりとりの前で適切な表情を保つ自信はない。

翻って、マリオンは苦笑しながらも真面目に返す。

「やめておきなさい。Ｍ３１がＤになるのも、彼女が節制を欠いた時の事よ」

その遠回しな言い方に俺は少し戸惑ったが、少し考えて。

――なるほど、そのＭ３１も普段はＣだが、節制を欠いて、太った時だけ、胸がＤになるという事か……。

と理解した。考えてみると、この連中の経口摂取は緑茶をはじめ、日本食中心だった。夕飯などは筍（たけのこ）やら、椎茸（しいたけ）やら、蓮根（れんこん）やらで、腹はたまるが精がつかないものばかりだった。それはマリオンが日本人だからではなく、ダイエットフードだからなのだろう。

実際、マリオンはこの仮説を裏付ける説明をする。

「現代の食生活だと、痩せるよりも太る方が簡単よ。だから、ここの生活習慣は太らないように工夫してある。あなたの胸回りが控えめなのなら、それはあなたがその生活習慣を順守した結果。優等生の証よ。誇りに思いなさい」

「しかし、私は現状に満足したくありません。向上心を忘れたくはないのです」

エムスリーフォーは立派だった。発言の一部分だけを切り取れば。

「わかった。では、言い方を変えるわ。豆乳の摂取量を増やし、蛋白質と女性ホルモンを増やせば、たしかに胸を大きくできるかもしれない。でも、それを制御できるの？」

「巨乳の弊害はＦカップ程から、本格化すると聞きます。実際、第一世代は既にＥに突入

していますが、深刻な問題は報告されていません。まして、私はまだBです。巨乳の弊害よりも、貧乳の弊害を恐れるべきです」

「あたしが問題にしているのは、蛋白質と女性ホルモンを過剰摂取する弊害よ。Bカップだろうが、Cカップだろうが、現状に問題はない。不必要なリスクを選択できるはずがないでしょう？」

「し、しかし……」

下らない話題だが、下らないなりにマリオンは正論だった。

逆にエムスリーフォーは下らない正論に刃向う。

「それでも、私はエムツースリー姉さまの様になりたいのです……！」

――『いずれアヤメかカキツバタ』……か。

……俺はこの国の諺（ことわざ）を髣髴としていた。

アヤメとカキツバタは共に美しく、そっくりな花だ（当然だ。生物学的には同じ科で、英語では共に Iris だ）から、区別もつき難いという意味らしい。あるいはヒラメに比べ、カレイは下魚だという（さすがにこれは異なる科だ。とはいえ、やはり同じ目で英語では共に flounder となる）。

正直さっぱりわからない世界だ。

しかし、日本語でアヤメとカキツバタが異なる名を持つ以上、この二つも時間をかけて観察し続けば、いずれは見分けられるという理屈はわからないでもない。

アラビア語で岩沙漠（ハマダ）も砂沙漠（エルグ）と呼び分けられる乾燥地帯を、日本人はまとめて『砂漠（さばく）』と呼んでいるが、しかし、日本人も慣れれば、見分けられるであろう事と同じだ。

――そして、この【娘たち】も同じ理屈なのか？

俺は、花を見ても綺麗だなと思うだけで、それ以上の感想が出てこない男だ。だから、アヤメとカキツバタの区別もつかない。共に綺麗だとは思うだけだ。マリオンの娘たちを皆美少女だと思ったように。しかし、それも見慣れれば、見分けがつき、また優劣もつけたくなるのかもしれない。あるいは似ている分だけ、その差が際立つのかもしれない。

――いや、既にその兆候はあるか……。

実を言えば、俺は【娘たち】を見ても、以前ほどには圧倒されなくなってきた。今でも美少女だとは思う。だが、今では完璧と形容はしない。容姿も挙動も、非常に高い水準にあるものの、わずかに隙を見つけつつある。当然だ。マリオンが口を尖らせたように、彼女たちも人間なのだから。

また、その認識の変化を俺は好ましく思っていた。例えば、【娘たち】の中でも年長者組は枝毛が多い。あるいは年少組には八重歯の気がある。近寄らねば、わからぬ程で、か

えって可愛らしくもある。何より、それは完璧ならざるが故の個性であり、彼女たちを見分けるコツになるかもしれない。

しかし、それは瑕疵ともいえるのだ。

そして、俺にはわからぬ瑕疵はまだまだあるはずだ。

それをよく見えるが故に、この娘たちは気になって仕方がないのだろう。

――あるいは『俺達』も同じか？

俺が子供の頃、爺さん婆さん連中は「今の若い子は一人残らず美しい」と言っていた。当時は意味がわからなかった。いや、美しい子がいるのはわかる。が、でぶでぶと太り、贅肉だらけの男子や、かつてのマリオンのように俯いてばかりの女子の、どこが美しい？

……そんな俺の疑問は、飢えた事ない者の傲慢だったのだろう。

故郷のアブ＝ダビが石油の富で満たされるようになって、まだ百年も経っていない。

祖父母達はそれ以前を生き抜いてきた。

だから、貧困が戦火を呼び、戦火が子供の顔を物理的に傷付けてきた時代の証人なのだ。栄養失調による病もなく、直射日光による皺すらない――そんな俺達若い世代の顔立ちを喜んでいたのだ。

だが、それが当り前となった俺達の世代では、たかが肥満や姿勢が醜悪となった。皆が貧しかった頃ならば、等しく『美しい』と讃えられた健常児の間ですら、優劣が競われるようになったのだ。

――同様に、遺伝子調整や生活習慣管理で全員が美しくなった【娘たち】でも、今度はその間でさらなる優劣が競われるのか……？

俺がそんな事を考えていると、マリオンはいきなり話題を変える。

「ねえ。髪を触らせて」

「え、あ、はい」

そして、エムスリーフォーは背を向け、その長い金髪をマリオンに弄らせた。

――……女って、こういうの好きだよな……。

俺は覗き見ながら、その光景に感心していた。

エムスリーフォーの金髪をマリオンは器用に編み込んでいくのだ。

気がつくと、二つ結びの三つ編みお下げが完成していた。

「これは……」

「あたしが昔憧れていた格闘ゲームのヒロインの髪形よ」

それもどうなのか？――という台詞だった。

しかし、エムスリーフォーはその美貌に喜色を浮かべる。

「６５のＢカップだったわよね？」
「はい。身長１５４センチ体重４２キロ。スリーサイズは上から７８・５７・８０です」
……俺はもはや何もツッこまない。
「ねえ、一晩待ってくれる？　あなたに素敵な贈り物をしたいの」
「は、はい」

そして、翌日。

新型タマゴロモがエムスリーフォーへ送られるという。
名目は精勤賞。なお、タマゴロモは形状が異なるだけで、機能には差がない。つまり、勲章の一種だ。
――優等生の証……か。
悪くはないと思う。見分けがつくようにして欲しいという俺の要望にも合致している。
だが、それ以上にマリオンの壺にはまったらしい。
着替えたエムスリーフォーを前に、マリオンは小娘の様にはしゃいでいる。
「ね、ね、直立不動で敬礼してみて」
「はい」
エムスリーフォーは忠実に、キレのある角度で敬礼する。それでいて、左手首の位置も操典通り。相変わらずの錬度だ。
しかも、その碧眼には怜悧な力強さが加わったように思える。
――……こうして改めて見ると……
やはり、その整った顔立ちは凛々しさすら漂わせながらも、どこか幼げで……。
相変わらず、肌に密着する素材が肉感的な曲線を描きつつも、どこか儚げで……。
――やはり、綺麗だ。
素直にそう思えた。長く美しくきつい三つ編みお下げも、膨らみきっていない、だが、その形のよさがはっきりとわかる胸元も、引き締まった背筋がよくわかる背中も、薄らと腹筋が浮かんだ細い腰周りも、お尻もぷにぷにした太股も――すべてが美しい。
際どいハイレグカットとＴバックの喰い込みもよく似合う。
――……喰い込み……？
そのタマゴロモはハイレグレオタードの形状をしていた。
たしかに元々、タマゴロモはレオタードに近い性質だった。筋電位を測るだけでなく、動きを妨げない事も念頭に置かれていたからだ。しかし、それは同時に全身を覆う事も、

前提となっており、露出自体は控えめだった。
しかし、このエムスリーフォー用新型タマゴロモは脚部をばっさり切り捨てたハイレグカットだった。それも腸骨稜の辺りまで丸見えの際どい角度だ。その上、後ろはTバック。若々しい臀部は丸出し。おまけに背中も大きく円形に空いている。
一応、太腿には例のデジタルタトゥーが迷彩の様に張り付けてある。だから、最低限の体調管理機能は維持されているようだが……。
「なあ……どうして、こんな格好をさせているんだ？」
「言ったじゃない。昔憧れていた格闘ゲームのヒロインに似ているからって」
「じゃあ、何でそいつはこんな際どい格好をしているんだよ！」
「それはファンの間でも永遠の謎とされているわ」
「ただの変態じゃねえか！」
せめて、武器を隠し持っていない事の表明とか、それこそ、格闘技が古代から肉体美を競うものだからとか、その程度の理屈もないのか。
「エムスリーフォー、次は対空上段蹴りよ！　さあ、その衣装で大きく股を開いて！」
「やめんか！」
下劣な笑みのマリオンと、忠実に従うエムスリーフォーを、俺は一喝した。